

2014. 10. 22 (水)

## 孤独と自分らしさ

Hans Peter Liederbach

リーダーバッチアです、よろしく願いいたします。正直申しますと、孤独というテーマについてしゃべるようにと言われたのですが、困りました。何をしゃべればいいのかよく分からなかったのです。しかし、哲学をやっている私は、物事についての概念を重視しているので、まずは孤独の意味とは一体何なのか、考えてみたいと思います。

### ネガティブな意味での「孤独」

『広辞苑』を引いてみますと、次のような定義があります。「孤独というのは頼りのある人や心の通じ合う人がいなく一人ぼっちで寂しいこと」です。それから「仲間がなくて、一人でいること」という説明があります。その他に孤独感、孤独死といった言葉もあります。これらの説明から分かるように、孤独というのはあまり良い意味ではないのです。大体ネガティブな意味合いを帯びています。つまり孤独な人はかわいそうで、みじめな存在です。救ってあげなきゃいけないというふうに、われわれは思うのではないのでしょうか。少なくとも「孤独」という言葉にはそういうイメージがあります。人がそう考えるのは、ある人間像に基づくのでしょうか。例えば、古代ギリシャにおいて、人間は社会的動

物として考えられていました。この定義を初めて打ち出したのはアリストテレスという哲学者です。つまり人生の豊かさ、強いて言えば人間存在の完全性は、他の人間と共に生きることにあると行うことができるのではないのでしょうか。確かにパートナーや仲間、友人と一緒に映画を見たり、音楽を聴いたりすることは、同じことを一人ですることより充実感を与えてくれるでしょう。

### 「孤独」の肯定

けれども個人差があるのではないかと言う人もいるかもしれませんが、つまり一人であることこそ映画を見たり、音楽を聴いたりするのが楽しいのではないかというかもしれないのです。とりわけ家族に関して、そう考える人は大勢いるでしょう。

ちなみに家族の良い所は何か知っていますか。いつも誰かが居ることです。家族の悪いところは何でしょう。いつも誰かが居ることです。それに孤独をあえて求めて選ぶ人もいるのです。Web で探してみたのですが、あるブログを見つけました。「孤独を楽しむ」というのです。つまり、このブログを書いた人にとって、孤独はネガティブな意味合いではなく、ポジティブなものです。そのブログ

には、孤独の良いところについていくつかの理由が挙げられているわけですが、引用させていただきます。1. 人と付き合う必要がなくなり、ストレスはないです。2. お金が掛からないです。3. 話題を探さなくてもいいし、今のように、つまらない話を聞かなくてもいいのです。4. 家族の事で心配をしたり、責任を持つことがない等々の理由が挙げられています。

### 「孤独」と否定的自由

このブログを書いた人が、自由とか自分らしさ、または本来性といった難しい概念を使っていないにもかかわらず、これらの思想はやはり無意識に動いているのではないかと思われれます。つまり彼が志向しているのは、責任なしの、いわば否定的自由かもしれません。そして、その自由を獲得するとともに、自分らしさを実現できているのかもしれません。今、否定的自由と言いましたが、何故、否定的なのでしょう。上述の理由を思い出してみてください。否定形が多くはないでしょうか。人と付き合いなくてもいい、ストレスはない、お金が掛からない、責任を持つことがない、そういう否定形が非常に多いのです。つまり、目指されたものは「～からの自由」です。例えば、人の付き合いから自由になりたいということです。しかもこのブログの中には、重要な事が指摘されています。つまり人間関係において、自分がやりたい事ができなくなり、本来の自分を必ずしも実現できないということでしょう。確か、われわれは普段、世間に左右されてさまざまなルールに従い、本来の自分を常に失ってしまうと言うことができないでしょうか。

それで、世間から自由になれば孤独に入り、そして本来の自分を取り戻すことができるのではないかという発想が、このブログを書いた人の頭の中にあるのではないかと解釈できなくはないのです。

### 「重要な他者」の役割

ただし、ここにある疑問が生じます。そもそも、いわば、引き算みたいな手続きを通じて、自分らしさ、本来性ないし本来の自分を確保できるのでしょうか。そもそも人は、一人で孤独において本来の自分を形成し、維持することができるのでしょうか。社会心理学者、G. H. ミードによれば、それは不可能です。本来の自分、ミードはこれをアイデンティティと呼ぶのですが、本来の自分を形成するために、いわゆる重要な他者が必要不可欠になります。重要な他者というのは何でしょう。ミードによれば、もちろん両親、兄弟、親戚、友人、場合によっては、先生等々の人々です。これらの人たちは、われわれに何をしてくれるのでしょうか。われわれを価値体験あるいは価値そのものへと導いてくれるということです。とりわけ、生い立ちや青春時代において、これが明らかになります。価値体験・価値そのものへの指導は自分が重要な他者の価値を鶏呑みにするということを意味するわけではありません。批判的対決も含んでいるのです。とりわけ青春時代においては、それが明らかでしょう。というのも青春時代において、親に反発し、自分自身を見つけ出そうという動きがあるからです。つまり重要な他者というのは、ある模範のみならず、いわば反発相手にもなり得ます。先のブログを書いた人は、重要な他者の役割を認め

るかもしれませんが、つまり本来の自分の形成時期には、重要な他者が必要であるかもしれませんが、大人になったら、その重要な他者に頼らなくてもいいのではないかと、自分らしさは自分で決めればいい、というふうに言うかもしれません。

## 自分らしさと言語

ミードの半世紀後、つまり1980年代、90年代、カナダの哲学者チャールズ・テイラーが指摘したように、その自分形成は本質的に対話的な営みです。そして、それが一生涯に続いていると言っています。何故なら、本来の自分が流動的なものであるからです。時には、再確認する必要があります。人生のなかの色々なクライシス、例えばミッドライフクライシスの時に、それは必要になるのです。この再確認は、どのように行われるのでしょうか。テイラーによれば、ある物語を作ることによってです。つまり自分の今までの人生は、どのようなものであったのか、その人生を支配した価値、信念はどういうものであったのかといった問いから出発して、自分の物語を作ります。では、少なくともこの物

語を、孤独に作り上げることができるのではないかと、先ほどのブログの人は言うかもしれませんが、しかし、こうした考えは間違いです。何故なら、自分の物語を作る際には言葉、言語を使用しなければならないからです。そしてこの自分を表現する言葉は、自分が作ったものではないのです。ずっと前から存在しているものです。重要な他者も、この言葉を使用したわけですから。つまり大人になっても、本来の自分を維持する際には、何かに、あるいは誰かに頼らなければいけないのです。そうしますと、孤独で自分らしさを手に入れることはできないということが見えてきました。けれども孤独は何の役にも立たないとも言えません。つまり、孤独はある世間から離れた場所を提供してくれるのです。そしてこの場所において、自分のための重要な他者は誰なのか、今、現在彼らがどのように自分の人生に関わっているのかという問いができるのです。そして「～からの自由」ではなくて、「～への自由」という道が開くかもしれません。ご静聴どうもありがとうございます。

(社会学部教授)